

イメージ・ファンタジー

松 島 暢 志

イメージとは、目の前に存在しない事物を想定したり、事物間を関係づけたりする精神機能のことです。子どもは1歳半を過ぎたごろから、物を何か他のものにみたとしたり（象徴遊び）、過去に見た大人の真似を時間がたってから行ったり（延滞模倣）するようになります。このような活動をする上で必要な精神機能が「イメージ」であり、イメージをするための能力を「表象」、イメージを用いて生まれたものを「想像力」と呼びます。

イメージを持たない1年半の間、子どもは「いま・ここ」の世界で生きていられると言われます。自分が見たもの、自分が触ったもの、自分が動いたこと——イメージをもたない幼児は、「いま・ここ」に存在する世界のみを感じ取り、反応しています。

しかし、心の機能が発達し、イメージすることができるといことは、「いま・ここ」の世界とは異なる、新しい世界を体験できるということになります。例えば、粘土でケーキを作るという遊び場面を考えてみましょう。幼児が「いま・ここ」の世界にとどまっているならば、どんなに上手にケーキの形を再現したとしても、粘土は粘土のまま、ただの粘土遊びで終わってしまいます。しかし、目の前の粘土を頭の中でイメージしたケーキとして置き換えることができるようになると、粘土は「いま・ここ」の世界を飛び出します。これによって、『おいしそう！』『甘いね』など、まるでケーキを食べているかのような遊びに発展させることができます。心理学におけるイメージや想像力は、自分の経験や体験をもとにして作り上げられるもので、子どもとは切っても切り離せないものです。

ファンタジーと聞くと、「ハリー・ポッターシリーズ」や「ハウルの動く城」などのような作品を思い浮かべる人も多いのではないのでしょうか。しかし心理学におけるファンタジーとは、そのような作品のことだけをいうわけではありません。「ファンタジー」とは、過去の経験を基に新しいイメージを作り出す想像の一種で、あまり現実的でない、非合理的なものを意味するとされています。「空想」と呼ばれることもあります。これには、魔法のような非合理的な力や、サンタクロースやおばけのようなあまり現実的でない存在を信じることも含まれます。

子どものもつファンタジーの一つに「空想の友だち」というものがあります。もし4歳くらいの子どもの、誰もいない椅子に向かって、大人の目には見えない誰かに話しかけている場面を見たとしたら、私たちはぎょっとするでしょう。このような「自分にはしか見えないキャラクターを、一定期間有して、遊んだり、会話の中で触れたりすること」は、実はそれほど珍しいことではありません。最近になるまで、空想の友だちは精神病理的なものの現れとして考えられてきました。今でも、一般に親の間では、空想の友だちの出現は良くないもの、怖いものという認識が広がっています。しかし、空想の友だちをもつことは、子どもの想像力を伸ばしたり、たくましい人格を形成するなどの肯定的な面があることを知り、寛容的に見守っていくことが重要とされています。

〈引用・参考文献〉

丸山良平・横山文樹・富田昌平『保育内容としての遊びと指導』建帛社、2003年